

国際シンポジウム

報告書
Report

共に生きる

スポーツとアーツの可能性

International Symposium "SPORTS, ARTS & INCLUSION"

日時|2017年9月29日(金) 13時30分～17時30分

会場|東京藝術大学上野キャンパス 第6ホール(音楽学部4号館)

DATE Friday, September 29, 2017 13:30 - 17:30

VENUE Tokyo University of the Arts, The Hall 6

主催|日本財団パラリンピックサポートセンター 東京藝術大学 COI 拠点 ベルリン日独センター (JDZB)

協力|ナント国際会議センター「シテ・デ・コングレ」 一般社団法人アーツ・イノベーション・プロジェクト (AIP)

後援|厚生労働省 文化庁 スポーツ庁 台東区

ORGANIZERS

The Nippon Foundation Paralympic Support Center
The IOC Site, Tokyo University of the Arts,
Japanese-German Center Berlin (JDZB)

Cooperated by

La Cité, Nantes Events Centre
Arts Innovation Project (AIP)

Supported by

Ministry of Health, Labour and Welfare
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
Japan Sports Agency
Taito ward



目次

シンポジウム概要・開催趣旨

プログラム

要旨

基調講演

- 「スポーツ・アート・サイエンス」 松下 功（東京藝術大学副学長）…………… 3

第1セッション スポーツ

- 「障がい者のインクルージョンにおいて競技スポーツは最後の障壁の一つとなっているのか」
オットー J. シャンツ（ドイツ コブレンツ＝ランダウ大学教授）…………… 4
- 「日本社会における障がい者スポーツのあり方」
藤田 紀昭（日本福祉大学スポーツ科学部学部長）…………… 6

第2セッション アート

- 「アートが持つもう一つの可能性：都市における癒しの実践とメンタルケア」
ラシエル・ボーシェ（フランス ナント国際会議センター「シテ・デ・コングレ」理事長）…………… 7
- 「未来の多様性を開拓する～アール・ブリュットという視点から～」
小林 瑞恵（社会福祉法人愛成会副理事長）…………… 8
- 「新しい評価軸を創る－芸術と福祉のコラボレーションを通して」
沼田 里衣（大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授）…………… 9

第3セッション パネルディスカッション

- 進行：小倉 和夫（公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンター理事長）……………11
- パネリスト：全講演者

登壇者プロフィール ……………19

国際シンポジウム 共に生きるスポーツとアートの可能性

シンポジウム概要

日 時：2017年9月29日（金） 13時30分～17時30分

場 所：東京藝術大学上野キャンパス第6ホール

参加者数：86名

主 催 者：公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンター、東京藝術大学 COI 拠点、
ベルリン日独センター（JDZB）

協 力：ナント国際会議センター「シテ・デ・コングレ」、アーツ・イノベーション・プロジェクト（AIP）

後 援：厚生労働省、スポーツ庁、文化庁、台東区

開催趣旨

スポーツやアートを障がい者と共に楽しむことのできる共生社会の実現に向けて、東京2020パラリンピック大会は、いかなる契機となり得るだろうか。スポーツとアートはどちらも障がい者の社会参画を促す活動として有意義だが、その意味合いや性質には類似点と相違点がある。このシンポジウムは、それぞれの特徴や欧州と日本の状況を把握し、その間で比較しつつ複眼的に議論するために開催することとしたものである。

プログラム

13 : 30 開会あいさつ

高橋 陽子（公益社団法人日本フィランソロピー協会理事長、
ベルリン日独センター日本側評議員）

13 : 35 基調講演「スポーツ・アーツ・サイエンス」

松下 功（東京藝術大学副学長）

13 : 55 第1セッション スポーツ

「障がい者のインクルージョンにおいて競技スポーツは最後の障壁の一つとなっているのか」

オットー J. シャンツ（ドイツ コブレンツ＝ランダウ大学教授）

「日本社会における障がい者スポーツのあり方」

藤田 紀昭（日本福祉大学スポーツ科学部学部長）

14 : 45 休憩

15 : 05 ミニ・パフォーマンス

R. シュトラウス作曲「鳴り響くハート」

G. ロッシーニ作曲「饗宴」

出演：Soprano 橋本夏季 Piano 高木由雅

15 : 25 第2セッション アーツ

「アートが持つもう一つの可能性：都市における癒しの実践とメンタルケア」

ラシエル・ボーシェ（フランス ナント国際会議センター

「シテ・デ・コングレ」理事長）

「未来の多様性を開拓する～アール・ブリュットという視点から～」

小林 瑞恵（社会福祉法人愛成会副理事長）

「新しい評価軸を創る－芸術と福祉のコラボレーションを通して」

沼田 里衣（大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授）

16 : 25 第3セッション パネルディスカッション

進行：小倉 和夫（公益財団法人日本財団パラリンピックサポ
ートセンター理事長）

パネリスト：全講演者

17 : 25 閉会挨拶

小倉 和夫

スポーツ・アーツ・サイエンス

松下 功

東京藝術大学副学長

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催まで、あと3年を切りました。日本は文化立国として、平和の意義と価値を世界にアピールをしていかなければなりません。1964年の東京オリンピックでは、戦後の目覚ましい復興と日本の世界における存在の大きさを訴え、1972年の札幌大会でのジャンプ競技における日本選手の活躍に興奮し、そして1998年の長野大会は、私にとって大きな意義のある大会となりました。直接的に音楽家としてこの大会に関わり、文化プログラムとしてのオペラを作曲し、長野県民の総力を結集した大きな公演を行い、同時にオリンピック開閉会式の選手入場行進曲（オリンピック・マーチ）を作曲させていただきました。スポーツの大会だけでなく、文化の祭典に作曲家として関わったことは、私の人生に大きな力を与えてくれました。現在、東京2020大会の文化・教育委員として、長野で得た経験と感動を若い世代に受け継いでもらいたいと思っています。

「より速く、より高く、より強く」をモットーに発展してきたスポーツの世界に、今「より美しく」の概念が加わってきました。美しく、すなわち美の世界へと目を向け始め、芸術性を追求する競技が増えてきています。美の世界を探究している東京藝術大学は、2017年に創立130周年を迎え「チャレンジする東京藝大～感動を呼ぶ芸術～」をモットーに、2020年に向けて心を育む美の活動をさらに展開していきたいと思っています。

本シンポジウムのタイトルは、「共に生きるスポーツとアーツの可能性」ですが、東京藝術大学との芸術活動において、障がいのある人たちは生きることの素晴らしさを全精力で表現していました。そんな彼らの素晴らしさをもっと多くの方々に知ってもらいたいと、6年前より「障がいとアーツ」という企画を始めました。昨年招いたチリの片腕のギタリストは、自分なりの技法を見出してプロになりました。この数年は、「聞こえる色、見える音」をテーマに、出演者も聴衆も会場も一体となった公演を実施しています。この活動は産官学が一体となった研究機関である東京藝術大学 COI（Center of Innovation）拠点の「障がいと表現」チームが中心となって行っています。同拠点では、2020年に向けて新しい文化のあり方を研究する「2020構想」チームが活動を行っており、東京2020大会に向けて、日本の科学技術力・芸術・スポーツが一体となった新しい美の表現の可能性を追求しています。2016年の夏より始まった「Summer Arts Japan」では、スポーツ選手にセンサーを取り付け、その筋肉の動きをAIで変換してピアノ演奏を行い、オーケストラと共演しています。スポーツ選手による新たな芸術表現になると共に、子ども達へのスポーツ教育への展開、介護の世界で音と一緒に歩くことで生きる喜びを見出すなど様々な展開を考察しています。2017年は、車椅子バドミントンの選手と共演しました。彼らの腕の動きを音に変換し、その可能性を広げました。今後は音だけではなく、色彩など空間での表現を探究し、障がい者スポーツに新たな感動を呼びたいと考えています。

3年後に迫った東京2020オリンピック・パラリンピック大会に向けて今なすべきこと、それは、この地球に共に生きるすべての人たちが、生きる喜びを表現し感動を共有すること、そして未来を担う子ども達が自由で大きな夢を描けるような世界を創生することではないでしょうか。

障がい者のインクルージョンにおいて競技スポーツは最後の障壁の一つとなっているのか

オットー J. シャンツ

ドイツ コブレンツ＝ランダウ大学教授

教育、雇用、レジャー、文化など大半の社会的分野において、私たちの民主主義社会は、障がい者を包摂するために大きな努力をしている。2006年に国連総会において採択された障がい者の社会的包摂を保障する国際人権条約「障害者の権利に関する条約」の締約国はすでに170カ国を超えた。

スポーツや運動の分野を見てみると、障がい者を包摂することを目的とする行動、関与、プロジェクトが数多く認められる。とはいえ、こうした包摂の努力は、大方のところ、レクリエーションスポーツ、体育あるいは草の根スポーツに限られている。トップレベルにおいては、健常者スポーツと障がい者スポーツの間に明確な区別と分類が根強く残っている。この区分の最も顕著な例は、オリンピックとパラリンピックの厳格な分離である。これらのイベントを2種類に分類することは、障がいのあるアスリートの周縁化あるいは排除とさえ考えられ得る。オリンピックは、おそらく常に最も権威のあるのカテゴリーであり、障がいのある選手にはほぼ手の届かないものであるからだ。

競技スポーツの構造的な目的は、最優秀者を選抜して栄誉を讃えるために運動能力に従い分類し、順位をつけることにある。一方、包摂のコンセプトは、これとは反対に、呼び集め、多様性を高く評価し、能力（障がい）を尊重するものである。競技スポーツの主たるイデオロギーは Ableism である。Ableism とは、「共感、思いやり、優しさなど他の能力よりも、例えば生産性や競争力などの特定の能力を評価し奨励する特定の社会集団や社会構造の心理に言及するときに、障がいのある活動家たちが用いる観念である」（Wolbring 2008, 253）。競技スポーツは、競技場における一種の社会ダーウィニズム－最速の者、最強の者、最も有能な者、最も熟練した者の生存を促進するものである。

ハイレベルのスポーツと包摂との間のこうした矛盾を考えると、競技スポーツは包摂と相容れないものであり、包摂に対する最後の障壁のひとつとなっていることが明らかであろう。とはいえ、この障壁を取り払う様々な試みがなされているが、成功したものはまれであり、他は意見の分かれるもので、今なお盛んに議論が行われている。

本講演では、オリンピックとパラリンピックのこうした分離と、競技スポーツにおける競争と包摂の明白な非両立性の問題について、哲学／倫理学、障がい学、スポーツ科学および歴史の観点および概念を用いて論じる。著者の考えを説明するため、人工装具をつけてオリンピックに出場した初の短距離選手であるオスカー・ピストリウス、8.40mの走り幅跳びの記録を持つ片足切断者のマルクス・レーム、あるいはオリンピック水泳に切断者として初めて出場したナタリー・デュトワなどの特殊なケースを検討する。健常者の競技においてトップレベルで競い合いたいと考える障がい者アスリートは、数多くの障壁や抵抗に直面する。障がいを技術的な装置で補う場合には、技術ドーピングや不公平の非難に直面する。補助器具なしには、彼らは一般に競争もできない。

最優秀者選抜の論理を特徴とするトップレベルの競技スポーツは、平等な機会と生来のままの（人工物を用いない）パフォーマンスという（神話的な）スポーツの価値観を依然として守ろうと、代償的な技術装置や補助器具を禁じている。そうしたハイレベルの競技スポーツにおいてアスリートの包摂を望むのであれば、既存のスポーツを適合させ、新しいスポーツを生み出さなければならない。こうして変更されたスポーツや新しいスポーツは、健常者・障がい者を問わず誰もがアクセスでき、参加と勝利の機会均等を可能な限りすべての人に提供すべきものである。

る (Schantz & Gilbert 2012)。アクセスが確保されているスポーツの具体的例をいくつか挙げて議論する。

21世紀においては、私たちの時代の倫理基準に合うよう人間の多様性にスポーツを適合させるべきであって、西洋の健常な男性アスリートのために19世紀に考案されたスポーツに人間を適合させるべきではない (Schantz 2016)。

出典：26ページ参照

日本社会における障がい者スポーツのあり方

藤田 紀昭

日本福祉大学スポーツ科学部学部長

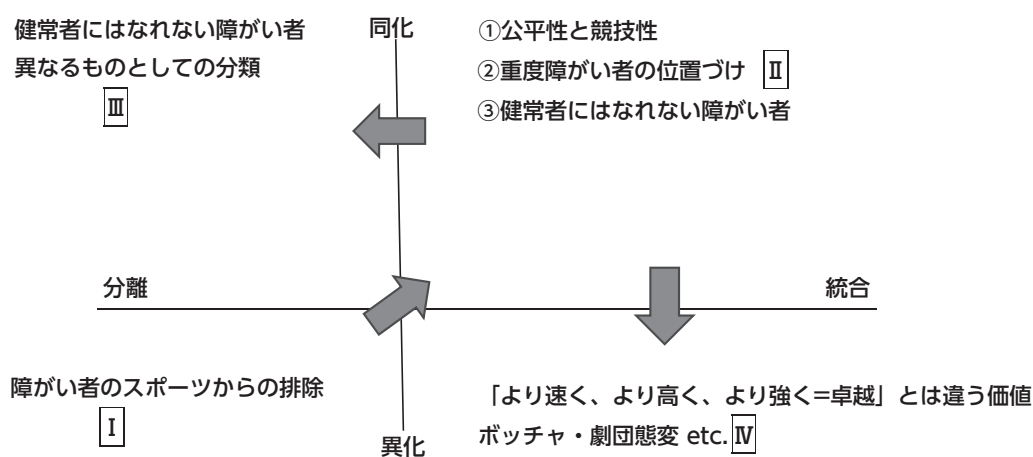
下図は障がい者スポーツのあり方を＜同化－異化＞と＜分離－統合＞の2軸によって作られる4つの象限で示している。同化とは同じ価値観を持つこと、異化とは異なる価値観を持つこと、分離は異なるものとして別々の世界に存在すること、統合とは同じものと理解され、同一の世界に存在することを意味している。

わが国では以前、障がい者スポーツは健常者のスポーツとは違うものとして理解され、扱われてきた。両者の監督官庁が厚生労働省と文部科学省と異なり、スポーツ施設は障がい者に配慮したものではなく、障がい者の利用を拒んでいた時代があった。つまり、両者は別のものとして理解され、別々の世界に存在していた時代である。下図のⅠ（異化×分離）に分類される在り方である。現在、両者の監督官庁は同じスポーツ庁である。そして、東京2020パラリンピック大会ではオリンピック大会と同じように多くのメダルを獲得することが期待されている。下図のⅡ（同化×統合）に分類される存在形式である。

しかしながら、障がい者スポーツがオリンピックスポーツに近づこうとすればするほど、その成績や記録での差異が明確になったり、オリンピックスポーツの記録を上回れば義足や車椅子を使った別のスポーツと理解されてしまう可能性がある。そして、「卓越」という同じ価値を追求することが難しい、より重度の障がい者は排除されてしまう可能性がある。つまりⅢ（同化×分離）で示される存在形式である。Ⅳ（異化×統合）は他と異なることを前提とし、差異をそのまま受け入れる。ここでは美しさや、価値ある身体の基本はひとつではなく多岐にわたる。経済的生産能力の高い身体や、秀でたパフォーマンスが可能な身体が高い価値を得るとは限らない。多様なものさしがあることを認めることが原点となる。まさに多様な価値の受け入れである。

わが国やパラリンピックが目指す共生社会の実現にはⅣの存在のあり方を理解し、認めていくことである。パラリンピックのレガシーがスポーツをやっている障がい者だけのものにならないためにも、また重度障がい者の切り捨てに帰着しないためにも重要なことである。

図 障害者スポーツの統合の在り方



出典：石川（2000）を基に筆者が作成

アートが持つもう一つの可能性： 都市における癒しの実践とメンタルケア

ラシエル・ボーシェ

フランス ナント国際会議センター「シテ・デ・コングレ」理事長

社会の変化のように、そして作品と病状の狭間で生まれる昇華作用のように、芸術は、病に苦しむものであろうとなかろうと対象に疑問を投げかけ、そして共に新たな生活のあり方を築くために、個と集団との関係について我々に疑問を投げかけてくる。

芸術的、文化的実践において癒しをもたらすもの、プラスに作用するものは、対象によって発見された創造的な自由な遊びである。市民的統合といってもよい。私が代表と務めるケアサービスの変革は、文化的なワークショップの創造、特に新たな詩の形態である「スラム」(ポエトリーリーディング)とともに、社会の中に完全に沈み込んだ人々を疎外から解き放つことを実践すべく、この方向性で進められた。

うつ病や自殺の危機にある20歳前後の若い患者に対して開催されているこのスラムのワークショップによって、どのようにメンタルケアが芸術活動に関わっているのかについて説明する。

治療後の効果について議論する前に、スラムの定義と原則についてまず説明する。我々は、スポーツ大会、言葉遊び、関係の構築と感情の訓練、自分自身への回帰という4つの治療軸を特定した。

次に、この芸術を媒介とした活動を振り返って5分間の映像を紹介する。

最後に、フランス・ナント市で10月に開催される重要かつユニークなイベント、2017ジャパン×ナントプロジェクトについて触れておきたい。このイベントでは、アール・ブリュット(生(き)の芸術)の展覧会が行われ、演劇、ダンス、とりわけ郷土芸能の「大蛇」が日本の舞台芸術として披露され、さらに国際研究フォーラム「障害のある人の文化芸術とケアと権利」が開催される。ジャパン×ナントプロジェクトは、とりわけ東京2020パラリンピック大会の序章となるものである。

2017年10月21日から25日にかけて開催されるこのユニークなイベント、ジャパン×ナントプロジェクトのために、ナント市を是非訪れていただきたい。

未来の多様性を開拓する ～アール・ブリュットという視点から～

小林 瑞恵

社会福祉法人愛成会副理事長

本講演では、2008年頃より日本のアール・ブリュットが国内外で注目を集めたことによって、社会でどのような変化が起きたかについて述べる。芸術を通じて人の表現の可能性や多様性を発信し、障害の有無に関わらず多様な人が活躍できる場を創出することにより、社会にある価値観の変革につなげていくために必要なことを考察する。

アール・ブリュットとは、「art = 芸術」、「brut = 加工されていない、生（き）の」という意味のフランス語で、正規の美術教育を受けていない人たちが生み出す独創的な芸術作品のことである。

現在、日本のアール・ブリュット（以下 AB）は、世界的に高い評価を受け、非常に注目されている。2010年の「アール・ブリュットジャポネ展（フランス パリ）」では、10か月で12万人を動員し、パリ市長から芸術文化勲章を授与された。同展終了後、日本国内で巡回展を行い、「日本の AB は素晴らしい」と広く一般に知られるようになった。これらの成功を機に、行政も民間も AB を積極的に支援するようになっていった。

多くの人を感動させ、世界をあっと言わせた。この一連の動きが「障害者に何をもたらしたか？」と言えば、もちろん本人たちの活動の場が広がったと思うが、より重要なのは、芸術文化が「私たち、社会の側を変えていく起爆剤に成り得る」ということである。社会にはいまだに、障害者に対して根強い偏見があるが、AB にはこの社会の偏見を変えていく力がある。これは芸術だからこそできることである。

また、中野の商店街と連携し、「芸術文化を通じたまちづくり事業」を行っている。この取り組みは、「障害者のために社会貢献活動をしよう！」ではなく、すべての人の課題として「多様な人たちが生きやすい社会をつくろう」というメッセージを発信している。福祉の枠組みを超えて、毎年様々な人が参加している。多様性を尊重する社会の大切さを伝えるツールとして、多様な作家がいる AB は非常に適している。

日本の AB は福祉の土壌から調査発掘が進んだため、障害のある作家が多く含まれている。しかし、AB = 障害者アートではない。AB の魅力は、障害の有無にかかわらず、多様な作家がいて、多様な表現があり、そこに人間の生きる力や創造の可能性があるを見ることができることである。AB には様々な切り口があり、活かし方がある。今後は福祉分野だけでなく、教育、美術、企業、行政など、様々な業界に積極的に関わっていただきたいと願っている。

新しい評価軸を創る－芸術と福祉のコラボレーションを通して

沼田 里衣

大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授

本発表では、障害のある人となない人が行う音楽活動において、どのような点が主に問題となり、その探求の成果としてどのようなものがあるのかを紹介し、社会の様々な価値観の異なる人が音楽的・言語的対話を通して新たな関係を築き、新たな居場所を見つける方法を考えたい。

1 共演：音の中で語り合う

- ・音楽では、年齢、人種の違いや技術・文化・価値観の違いなどあらゆる差異があったとしても、共に音を奏で、さらには共に舞台に立てる可能性がある。
- ・技術のある人となない人が共演する場合、その音楽に、教える－教えられる、サポートする－サポートされる、あるいは別の技術を共に見い出そうとしているのか、などの関係が現れる。

2 技術や価値観の差異のある人たちの共演方法とは？

- ・既成の音楽を使用する場合、その音楽の中で十分に自身の感性を生かしきれない場合がある。
- ・そこには次の二つの問題、既成の音楽こそ良いものだとする音楽に関する一面的な考え方と、障害者が頑張って社会参加をする姿こそ美しいのだという障害者の社会参加に対する考え方を指摘できる。

3 コミュニティ音楽療法が試みること

- ・音楽療法の領域では、即興音楽の手法などを用いながら、様々な困難を抱える人とのコラボレーションの方法が編み出されてきた。「音楽療法は、『何が音楽か、誰が参加できるのか、あるいはすべきか』ということに関する従来の限定された考えに挑んできたのだ」(Stige, B. et al.: Where Music Helps. Ashgate, 2010)
- ・「コミュニティ音楽療法」と呼ばれる最近の議論では、従来のセラピストクライアントという関係ではない関係性や、対象者個人の変化を目的とした目的志向型の活動ではない方法が模索され始めている。

4 即興や創造性を含んだ様々な音楽活動

- ・音楽療法の領域以外にも、音楽の即興性や創造性を含んだ次のような活動がある。
 - 「サルサガムテープ」：1994年から始められている横浜の障害のある人たちのロックバンド
 - 「otto & orabu」：2001年から始められている鹿児島しょうぶ学園の民族楽器と叫びのコーラスによるグループ
 - 「音遊びの会」：2005年から筆者が神戸で企画した障害のある人と即興の得意なミュージシャンとのグループ
 - 「おとあそび工房」：2014年から筆者が新たに始めた障害のあるなしに関わらない探求型グループ
 - 「こんとん」：東京で1997年頃より昨年まで続いた精神障害者によって緩やかなコミュニティを形成している活動。
- ・それぞれ参加者全員が生き生きと表現できるような演奏や場の設定の工夫がある。

5 メンバー、そして社会の変化（「音遊びの会」、「おとあそび工房」の事例より）

- ・障害者が舞台上で自信を持って自分を表現できるようになった、などの変化だけでなく、その場に関わる様々な人にとっても同様な変化がある。
➤例：音楽表現の幅が広がった、状況を含めた現象と捉える新たな見方が生まれた、グループ外部の視線が音楽療法や発表会という障害者の変化に対する興味から音楽的内容への興味に変わっていった。
- ・そのための工夫として、照明などの舞台設定の工夫、共演者（美術家、新喜劇、うどん製麺者、農家の人など）の工夫などがある。

6 新しい評価軸を生み出すこと

- ・音楽活動において障害のある人の社会参加を考える際には、既存の価値観ではないものの良さを十分に楽しめるような場の設定が重要である。
- ・「障害のある人の舞台を見に来るのは怖かったけど、聴きに來たら思っていたのは全然違って楽しくて、音楽の新しい一面に気付かされた」という感想もあった。
- ・一人一人の表現の魅力に光が当たるように、単一の価値観に当てはめて閉じ込めてしまわないような工夫が求められる。
- ・そのためには、会場の担当者、共演者、ケアする人、保護者などと、準備から広報活動などの様々な場面で、価値観の異なる人との丁寧な音楽的、言語的対話が必要となる。
- ・そうした工夫によって、障害のある人を含む様々な人々が、音楽活動を通じて新たな関係を築き、社会の中に新たな居場所を見つけていけるのではないだろうか。

パネルディスカッション

進行：小倉 和夫

パネリスト：第1、第2セッション講演者

小倉 では、パネルディスカッションを開始させていただきます。まず、ボーシェさんにお聞きしたいのですが、フランス人というのは非常に個性的な人が多い。また、フランス人はインディビジュアルズムを大変尊重されると思います。

さて、日本で、障がいがあるということは一つの個性であると言う人が最近非常に増えているのですが、本当にそうでしょうか。障がいがあるということは一つの個性である。個性であるならば、その障がいを大いに宣伝した方がいいわけですね。

あるいは、今日のプレゼンテーションを聞いていますと、障がいがあるがゆえに、むしろ古い習慣や先入観から自由になれる、自由になってくる人が出てくるとすれば、障がいがあるということはむしろ解放や自由への一つの入口になるということも言えるわけです。いったい障がいは個性なのか、そう考えて良いのか、ボーシェさんはいかがお考えでしょうか。

ボーシェ 私は、人間を認識するというのはいくつかの段階があると思っています。あるいは3段階あるかもしれませんが。最初の段階は、人間はハンディ、たとえ障がいがあっても人間であることに変わりはない。そういう意味で、このレベルにおいては、障がいがあるということはその人の名刺のようなものだと思います。

第2段階は、障がいと言うのはチャンスでもあり、可能性でもあります。

それから第3段階、共に生きるということです。今日の午後もずっとそのことについて話してきましたが、アートとスポーツというのは人間関係をつくる手段であり、それが共に生きるということを可能にすると私は考えています。繰り返しになりますが、人間というのは障がいがあってもなくても一人の人間である。そういうことをわかりいただくために今日「スラム」(ポエトリーリーディング)を紹介させていただきました。

小倉 どうもありがとうございます。私は男ですが、男であるということも個性なのか、そういう問題もあるわけで、いまのお答えを皆で考える一つのベースにしたいと思います。

次に、沼田さんにお聞きしたい。先ほどオットー・シャンツ博士が、競技スポーツは競争があってはじめて成立する、競争原理というものをどのように考えるかが、現代社会において非常に大きな問題であるという趣旨のことを言われました。芸術活動は、スポーツと違って必ずしもいつも競争しているわけではないと思いますが、逆にあまり競争しないと自己満足に陥る危険がある。つまり、障がい者アートの世界を拝見していると、すばらしいものもたくさんありますが、結局のところ自己満足に陥っているという側面もあります。これは障がい者アートに限らず芸術活動のすべてについてある程度言えると思いますが、芸術活動における競争原理についてどのように考えたら良いのかお聞かせください。

沼田 非常に難しい質問ですね。私なりの答えになりますが、競争も何を軸にして、どういった関係の中でそれを評価していくのかということなのだろうと、いまの時点では思っております。いろいろな軸がありますが、障がいのある人と接して、一緒に何か舞台活動をつくっていこうとしたときに、いままで自分が良いと思っていた価値観

ではうまくいかないことがあります。障がいのある人たちは、一般的な競争原理ではうまくいかない側面もあり、舞台上で寝てしまったり、そもそも舞台に出られなかったり、規則正しくリズムを叩くことができないこともあります。そのための評価軸を考えれば、そもそも競争にはならないわけです。しかしながら、そこにすごく魅力的なものが含まれているということがいろいろ発見できると思います。

たとえば、静かにできないということが始めはものすごく問題になって、どうやったら静かになるのだろうということを一生懸命考えていろいろなことを試した。ただ、そうすると「できるーできない」の基準が顕在化して雰囲気が悪くなる一方でした。でも、よく考えてみると、そもそも、なぜ静かにしなければいけないと思ったのだろうかと問い返されたような気がしました。そこで、静かにしないということをしたらすごく良くなっていったのです。そうして音遊びの会ではユニークな演目を作っていくようになっていったわけですが、そういった、新しい何かを発見していくという楽しさや喜びがあって、さらにそれを自己満足で終わらせないために、どういった舞台としての枠組みのつくり方があるのかを創造していきました。アーティストとコラボレーションをしていろいろなアイデアを一緒に考えたり、アーティストもいろいろな技法を持っていますので、そういったものを借りながら、共に舞台としておもしろくなる方法を考えていく。そうやって一般的な競争原理とは異なる価値観を様々な人々と対話しながら作っていける、そこにアートとしての可能性があるのではないかと私は考えています。

小倉 アール・ブリュットとか小林さんが提示されたいろいろな作品の方が、いわゆる芸術作品と言われているものよりも普通の人に親しみやすいということがあるのかどうか。アール・ブリュットを、地域の活性化や地域の人々との関係で街に展示すると言われましたが、アール・ブリュットの方が地域社会との関係が一般的な芸術よりも緊密である、あるいは人々の心に直接親しみやすく、受け入れやすいというところがあるとおっしゃいますか、どうでしょうか。

小林 はい、そう思います。アール・ブリュットの特性でもあると思うのですが、作家さんは「自分がアーティストになろう」と思って作品をつくっていない方が多い。自分の楽しみとして、つくりたくてつくっている人が多いのです。「作家になろうと思ってつくっていない」ということは、芸術作品をつくるために、どこかの美術の専門店へ行って、特別な画材を集めてつくることを、アール・ブリュットの作家さんはしない。ですから、アール・ブリュットの展覧会では、「親しみやすさを感じました」というアンケートの回答が多くあります。それは作品に、日常にある素材を使っているから、という理由も多分にあると思います。

「身近な素材でこんなにも創造性に優れたものがつくれるのか！」ということへの驚きがあると思います。

また、作家さん自身も、もしかしたら隣にいる人かもしれません。みなさんの周りにも、「あの人ちょっと変わっているよね」とか、「あの人少し変…」などと言われている人がいるかもしれません。でももしその人の作品と出会えば、「あんなの、誰もつくれないよね！」と見方が変わるかもしれません。実は近くにいる人が、誰も想像し得ないものをつくっていたりするかもしれません。高齢者の方や、障がいのある人も含めて、気づいたら「変なもの」や「すごいもの」をつくっていた。アール・ブリュットは、そういった暮らしの中にある芸術だと思います。

また、作家さんが芸術家を目指していないので、急に創作をやめてしまうこともあります。建物をつくっている作家さんですと、違法建築物だからといって取り壊されてしまう場合もあります。そのときにしか見ることでできない芸術であることも、アール・ブリュットのおもしろさのひとつです。地域の人と、その人を通じて会話になる。「ああ、私もそれ知ってる」とか、「ああいうのってすごいよね」とか。

ダイバーシティという言葉があります。しかし、ダイバーシティ「多様性」というとき、それが何を指すのかは人それぞれ違います。私にとっては、もちろん障がい者も含まれているのですが、相手にとっては多様性の中に障がい者が入っていないかったりする。「共に生きる」という価値観は、皆それぞれ、自分の世界や自分の人生

の中で出会った人としか「共」ではないので、それを広げて、「世の中にはこんな人もいるのだ」という視点を広げる。この社会にはすでにいろいろな人がいます。街の中で展示すると、それがどんどんコネクトしていき、世界はこんなにも多様であるということを伝えることができる。これはアール・ブリュットという芸術が果たせる役割の一つではないかと感じています。

小倉 これまでのいろいろな発言のポイントについて松下先生はたくさんコメントがおりではないかと思いますが、どうでしょう。

松下 私はこういう学校にいますが、いわゆる変わっている人が多いです。おそらく私もそうなのだと思います。障がいとか、変わっているか、変わっていないかというのはすべて度合いの問題ではないかと思います。たとえば私もメガネをしています。これも障がいです。見えにくいからしている。たとえば腰が痛いのも同じです。それが激しくなって動けなくなっていくと、障がいと呼ばれる。

そういう意味では度合いが違うのですが、我々にとっては競争もそうです。競争がまったくなかったら進歩はしない。けれど、それが激しくなっていくと、それが目標で自分の感性が弱ってしまう。ですから、何でもどのぐらいのバランスでいくか。芸術家というのは、ある面で、自分のことをどう評価されようと自分はこの道を行く、というところがあります。それがまったくないと、やはりわかりやすく受けるようにという状態になっていく。でも、最近では昔の東京藝大とは少しは変わってきて、やはりきちんと就職して、一般の生活をしたいという学生も増えてきている。だから、何でも、障がいで、私は度合いというか、バランスの違いがあるだけではないかと思っています。

そういう意味で、発想の豊かさを私は障がいのある方にすごく感じます。ですから、多様性が認められる時代になってきて、いろいろな人が表に出られる時代になって、理解が深まった度合いが変わってきたと私は思っています。これからは2020年に向かっていろいろな方がいることで、我々の感性も変わってくるし、お互い変わって、住みやすい社会に変わっていく途上にあるのではないかなと思っています。そうは言いながらも、先ほどのソプラノ橋本夏季さんのように大変厳しい競争を通して、自分のやりたいことをしたい、最先端に行きたいという強い力を持っている方々もいます。

小倉 では、そろそろスポーツの分野に移りたいのですが、オットー・シャンツ博士、藤田先生が、マルクス・レームとか、オスカー・ピストリウスとか、そういう人の例を提示されました。いままでは長い間伝統的に、障がいのある方が使う用具は、私の使っているメガネもそうですが、ある機能を補完する、健常者と同じようなレベルにできるだけ近づけるための補助的な機能を持ったものです。しかし、用具の意味が変わってきて、オスカー・ピストリウスではありませんが、それは身体機能を補完するだけではなく、むしろ一定の特別な能力、特別な特徴を発揮するための新しい機能を持つものになってくる。そうすると、障がい者スポーツにおける用具の意味が、身体機能を補完するという機能を超えてまったく別の意味を持ってくるのではないかという気もしますが、障がい者スポーツにおける運動用具の意味というものについてどういうふうに考えたら良いのか、その点をシャンツ博士に意見をお伺いします。

シャンツ 興味深い質問をありがとうございます。パラリンピック競技はかなり技術に依存しています。技術は、以前は治療法として使われていたのですが、いまは強化、つまり療法と強化の違いが曖昧になりつつある。切断した四肢に代わって義肢を使う場合、通常は療法、治療として、足に代わるものとして義足、義肢を使っていたわけです。ところが、義肢そのものが、いまはもともとあった肉体と血液に満ちた元の足よりも性能が高いかもしれない

い。

1999年にスポーツと障がいに関するある会議がスペインのバルセロナで開催されたときに、私が「将来、健常者より義足をつけた選手の方が速く走るようになるかもしれない」と発言したら笑われました。何という冗談だ、そんなことはありえないと、ほとんどの聴衆が笑ったのですが、その8年後、オスカー・ピストリウスが国内大会において、義足を使い銀メダルを獲得しました。

これからこの技術も大きく進歩すると予想します。NBIC 技術というのがあります。素材化学、ナノ技術、情報技術、生物学的技術、認知科学などがあり、こういった技術が組み合わさることが、将来は人間の強化、人類の強化になると思うのです。特にパラリンピックでは、おそらく健常者の運動選手よりもよい成績を出す障がいのある選手が登場すると思われます。

2年前に17歳だったスコットランド出身の女子選手は、片足を切断したのですが、両足を切断したい、残っている足も切断したいと言い出した。それは速く走るためだと彼女は言いました。なぜなら、ピストリウスのように両側切断、膝下だと走りやすいので、彼女はそれを希望しました。もう一本の足も切断してほしい、そうすれば義肢を取り付けてもっと速く走れるからと。

大きな進歩があると思います。障がい者にとっては一つの可能性、エンパワーメントの可能性だと思います。もしマイノリティがマジョリティよりもパワフルになったら、それはやはりマイノリティの少数派にとってはすごいエンパワーメントになるでしょう。

2016年チューリッヒにおきまして第1回サイバスロンというのがありました。パラリンピックみたいなものですが、いろいろな技術を使うことが許されています。人工知能とのインターフェースも使うことが許されていたり、いろいろな機械を活用して障がい者を支援しています。そして、機械を使って競争します。将来どうなるか。いずれにしても大きな変革が起きると思います。

小倉 デフリンピックでは補聴器の使用は禁止されています。今後、パラリンピックにおいても、一定の技術、一定の機能よりもさらに高度な機能を持つような器具は使ってはいけないとか、そういうようなルールメイキングというのは将来あり得るのでしょうか。

シャンツ それはすでにあります。パラリンピックでは制限がかけられていて、義肢の長さなどに関しても制限があります。特定のルールがすでに存在しています。でも、ルールは改変できる。ですから、どうなるかは私にはわかりません。

小倉 テクノロジーの発展とパラリンピックのあり方を考えなければいけないのですが、藤田先生には、皆が疑問に思っていることで、同時に最も難しい問題を質問させていただきたいと思います。障がいのある金メダリストや非常に有名になったアーティスト、そういう方々はもはや障がい者ではなくて一人のメダリストであるし、一人のアーティストである。つまり、すばらしい成績あるいはすばらしい結果を得て、障がいのある意味で克服された方々は、普通の障がい者から見れば、自分たちとは違う、異質な人間だということになるのではないか。よく言われることですが、パラリンピックをいくら華やかにやっても、一般の障がい者の方々がスポーツをたくさんやることにはならない。これはいろいろな研究からそういうことが言われている場合が多い。

つまり、トップを育成する。これはアーティストでも良い、スポーツマン、スポーツウーマンでも良いのですが、トップの方を育成すると、底辺と言いますか、皆さんがスポーツをやる、皆さんがアート、芸術活動に参加する、そういうことの刺激になるのかどうか。山を高くすればするほど裾野が広がるというようなことは本当にあるのか。その点はいつも皆さんが質問することなのですが、どうでしょうか。

藤田 本当に難しい問題をありがとうございます。私の調査の結果とこれまで言われていることを含めて言いますと、まずスポーツを始めるきっかけは何だったか、よく言う社会化という問題ですが、重要な他者は誰だったかということを質問した場合、障がいのない人は、たとえば男性であれば、兄弟がいる場合は、お兄さんであるとか、父親であるとか、同性の年上の方がきっかけだったと答えています。女性の場合は、母親であったり、女性の先輩であったりします。では、障がいのある人の場合にはどうか。これは私の調査結果ですが、その場合は同じ障がいのある人の影響が一番強かったという結果です。結果的には、自分の家族や兄弟の場合と、障がいのある友だちということで違うのですが、よくよく考えると、身体状況が同じような人たちがロールモデルになっているということなのですね。

ですから、やはりトップを育てる、それがロールモデルになっていくということがまず大事です。でも、それだけでは小倉さんがおっしゃったようにだめでして、いくら同じ障がいのある人がトップレベルでやっているのを見ても、自分には関係ない、トップレベルの人がやっているから自分とは違う、自分はそんなことができるとは思っていない人が、特に日本では多いですね。

結局、より身近な人がたとえば体育館に連れて行ってあげて、そこで一緒にプレーをして「ああ楽しいね」と、そこまでしてやり始めることができる。ですから、ロールモデルとしてトップの人が、いろいろこういうことができるというのを示して、身近な人がそこへ誘ってくれてと。もちろんトップの人が来て誘ってくれば一番良いのかもしれませんが、トップレベルの選手と、まだスポーツをやり始めていない人たちが好循環をする、そういうことが必要だと思います。

好循環のためには、特に地域でのサポートや、様々な行政施策が必要になってくるだろうと思います。それは日本の場合ですと、社会福祉協議会であったり、教育委員会であったり、いろいろな可能性が考えられますが、そういった人たちが連携して施策を考えていき、スポーツを始めたら。ですから、メディアでトップの姿だけを見せてもなかなか行動には結び付かないと思いますが、その間を埋める様々な施策があることによって、障がいのある人もスポーツが始められるということだと思います。カレーライスをつくって、「はい、食べろ」と言ってもだめで、レトルトパックのカレーを温めて、ご飯にかけてあげて、スプーンで最初の一口を食べさせてあげる、そこまでいって「ああ、おいしいな」というのがわかる。それと同じではないかと思っています。

小倉 これからは皆さんに自由に話していただきたいので一つ二つ問題を提起させていただきますが、その問題に限らず、いままでいろいろな方がおっしゃったコメントについてさらにコメントしていただいても結構です。

一つは商業化の問題をどう考えるか。障がい者芸術あるいは障がい者スポーツと言われるもの、これは普通の健常者の方々がやっているものに比べれば、どうしても商業化が遅れている部分があるのではないかと言う人がかなりおられる。たとえばアール・ブリュットについても、知的所有権をどうするかといった問題もある。一方で、商業化すればするほど、良い面もあるけれど、むしろ多くの方が参加するという意味においてはうまくいかないという面もあるかもしれないと思いますが、障がい者スポーツあるいは障がい者芸術活動の商業化についてどうお考えかということが一つです。

もう一つは、スポーツというのは身体を離れては存在し得ないですね。身体を離れて存在し得るスポーツというのがまったくないかどうかは疑問ですが、普通は身体を離れてスポーツは存在しないと思います。芸術は身体を離れても存在する。どういう意味かという、松下先生がつくられた音楽は、松下先生がいらっしゃらなくてもそこで演奏することができる。障がい者の方が描いた絵は、その画家がいなくても作品として存在しているわけです。

ですから、障がい者芸術の場合には身体あるいは人間を離れて存在しますが、スポーツの場合は、人体を離れて存在する、体を離れて存在するということは少し考えられない。この違いというのは、障がい者芸術活動と社会との関係、あるいは障がい者スポーツと社会との関係を考える上で、やはり違いがあるというふうに考える一つの理

由になるのかどうか。その辺りのことについてご意見を承りたいのですが、どなたでも。別にいまの問題でなくても良い、いままでここで議論されてきたことでも良いですが、どうでしょうか。

シャンツ いまのご質問、商業化についてお話ししたいと思います。これは藤田先生のおっしゃったこととも共通しますが、パラリンピックはどんどんプロ化し、商業化してきて、障がい者の中のエリート向けになってきています。問題は、一般の障がい者とパラリンピアンとの格差が広がっているということだと思います。これはよく障がい者たちが言うのですが、「この人たちは障がい者の社会を代表していない。私たちから遠い存在で、ほんの数パーセントのエリートたちだ。私たちのロールモデルではない」と。これは大多数の障がい者が考えていることだと思います。一般的に皆スポーツはしていませんし、パラリンピアンをロールモデルと考えていません。ですから、私の発表のときにも説明しましたが、このエリートをオリンピックの中に統合して、パラリンピックをもっと広いものにしないといけないと思います。重い障がいのアスリートとか、そういう人たちも参加できるイベントにして、重い障がいの人にも開放して、そういう人たちもアクセスできるようにする必要があると思います。

ボーシェ 複雑な問題だと思いますが、この質問に対するお答えを、私たちが10月にナント市で行います。シンポジウムのテーマにもなっているので、ぜひ皆さん、ナントに来て、その問題について考えていただきたいと思います。でも、その質問を前に引き下がることはありません。

二つのレベルがあると思います。一つは、障がい者が福祉頼りにならないということがあります。障がい者であれ一人の人間であるということを認めるのであれば、同じようなルールを適用するべきだと思います。たしかに芸術作品というのは商業化というか商品化が可能ですね。

もう一つ、私は女性ですが、それと同時に精神科医でもあります。芸術作品を見るときに、製作の意図はどこにあったか、意図があるか、ないかということを考えるべきだと思います。それを見てみると、たとえば症状ですね、鬱病とか、それと芸術的な創作というのは関連性があると考えています。ですから、一人の人間を、障がい者であれ人間であるというふうに捉え、そこにはその人が創作の意図を持っているのか、持っていないのかを見て、意図があるとすれば、なぜそれをするのかということを見ていかなければならないと思います。ヴァン・ゴッホは有名な画家ですが、彼も障がい者であったわけです。

藤田 私も商業化のことにしてお話しさせていただきたいと思います。価値を見いだして、それにお金を払うかどうかというのは社会が決めていくことで、障がい者スポーツに関してもそういう価値に皆だんだん気づき始めた。特にパラリンピック大会の東京での開催が決まって以降、様々な企業が障がいのある選手を雇用したり、コマーシャルに出したり、いろいろなことをやり始めています。ですから、おそらくオリンピックの選手たちと同じような形態で商業化が進んでいくのだと思います。

ただ、選手たちにぜひ知っておいていただきたいのは、パラリンピックは特にですが、子どもから高齢者まで、初心者からトップレベルの選手までスポーツの機会を提供するのが非常に大きな目的の一つになっているということです。ですから、トップレベルになればなるほど特にそこをきちんと意識して、先ほど好循環と言いましたが、自分たちは過去の自分たちを見る目で、いまスポーツをやっていない人たち、あるいは苦手な人たちにスポーツをやるきっかけをつくってあげるということを義務化というか、そういう責任を負っていることをきちんとトップレベルの選手に教育していくことが必要ではないかなと思います。その辺が、障がいがない人の場合であれば、自分でやろうと思ったらいつでもできますが、障がいのある選手の場合は何かちょっとした支援がないと始まらないというのが現状ですから、特に価値の高い、商業化してお金の儲かっている選手になればなるほどそこを意識してほしい。これは希望ですが、そう思います。

松下 人間が生きる原動力となるのは、あこがれと夢だと思います。たとえばスポーツでも、トップスターが出た、それがあこがれの的になるかどうかだと思います。日本ではすぐにブームになります。たとえば、ラグビーは日本が南アフリカに勝つまではあまり盛んではなかったのに、急に子どもたちがやるようになった。サッカーもそうだと思います。それはたぶんマスコミも非常に影響すると思います。そこにヒストリーをつくるわけですね。単にその選手がすごかったではなくて、その選手のバックグラウンドをうまくある面で商業化していったのではないかな。そういう意味では、今後パラリンピックの選手にもそういう時代が来てほしいと思います。

ただ、それは自分ではできるものとできないものがあるような気がする。たとえば車椅子に乗ってみようという体験コーナーはあっても、その選手になるというのはやはり違うし、ある面、ジャンル分けというのはしっかりあると思います。逆に、先ほどお話が出たボッチャは、子どもでもできるのではないかなということで、意外と普及するかもしれません。

芸術作品にしても何でもそうですが、先ほどの澤田真一さんが出てきて、トップスターが出たのですね。報道もされました。それによってやる、やらないではなく、彼に対する理解が増していく。だから、ある面であこがれるスターをつくるということは非常に重要なことです。ただ、そこに走ってしまうと、今度は大衆だけになって本物が消えていってしまう。先ほどのバランスなのです。いま2020年に向けて、盛り上げていくには、皆にあこがれと夢を持たせるということだと思います。スターだったり、作品だったりすることが多いと思います。

商業化という意味では、いままさに小林さんも我々にも法律問題、著作権の問題というのが出てきて、それをクリアにしながら取り組んではいますが、商業化という分野においては何ら変わらないという気がする。先ほどゴッホの話が出ましたが、多くの芸術家は私も最初にお話ししたようにどこか変だと、何を抱えていても夢を捨てない人たちなんですよ。先ほど私が紹介させていただいたギタリストも、絶対夢を捨てなかった。強烈な夢を捨てない人こそトップになり、またそれがヒストリーになったりしていくのではないかなと思います。ですから、私は夢を育ませながら商業化も検討と両方いきたいなと思っていますが、小林さん、どう？

小林 夢を捨てないことはとても大事ですね。やり続けた人、ずっとやり抜いた人がやはり勝ち抜くな、と。同じものを何十年もつuckingている人とか、たとえば澤田真一さんもあのトゲトゲをずっとつくり続けていて、いま世界で注目を集めています。

商業化については、松下先生がおっしゃるように、私は障がいのある人たちの新たな社会進出という意味においても非常に大切な視点であると思います。必要なサポートを用意しながら、障がいのある人たちも芸術の世界で活躍する未来をつくっていきたいと思っています。

いま現在活躍する作家さんは自分の意志を伝えられる人もいますが、例えば、ヴェネツィア・ビエンナーレに出展された澤田真一さんは自閉症という障がいがあり、本人の意志で、この作品を売ります・売りません、またこの作品をいくらで売ります、といったことは決められません。障がいがある作家が搾取されないように権利を守る人が必要です。そういった法整備を整えようとしているところです。理解啓発だけでなく、こうしたサポート体制というところでも、多様な人を支える仕組みが必要だと思うので、そういったところを整備しながらいろいろな人たちが活躍できる社会ができればいいなと思っています。

私の専門はアール・ブリュットですが、アール・ブリュットだけにこだわっているわけではありません。アール・ブリュットをきっかけに、さまざまな議論が起きることが重要です。会場に来た人が「この人はアール・ブリュットではないのではないか？」「これは現代アート？」「この人は漫画家の方に向いているのでは？」「グッズの方に向いているのではないか？」など、その人を知るきっかけになって、さらにそこから議論が出て、いろいろな人たちが幅広く活躍できるようなシステムがどんどんつくられていくと良いなと思っています。

沼田 私自身は音楽療法をもともとやっていたので、そちらの方では、たとえば先ほど少し言及したブリュンユルフ・スティーゲさんは、「商業化について十分注意すべきである。本人の意図のないところで身体から離れて、それが商品として売買されるというのは非常に注意すべきである」ということを言っていますが、それでも否定はしていない。それはわかると思います。というのは、商品化されることによって、どの段階で誰がどういったメリットを得るのかということはやっぱり注意深く考えていく必要があると思うからです。

音遊びの会も、テレビに出たり、CDをつくってそれがドキュメンタリー映画になったり、若手映画作家に使われたり、テレビのバックミュージックに使われたりということがある。それを本人たちがわかっているかどうかといたら、全然わかっていなかったり、出てうれしかったと思う人もいれば、いない人もいます。でも、それを支えている保護者がすごく喜んだり。いろいろな関係性の中で意味合いを持っていくので、商業化されることでお金がどういうふうな誰に分配されるのかという細かなことも含めて、全体で見ていかないといけないのではないかと考えています。決して悪いことではないし、ただ注意深く見ていく必要があるなという感じです。

小倉 これでこのパネルディスカッションは終えたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

登壇者プロフィール（登壇順）

2017年9月29日時点

松下 功 (Isao Matsushita)

東京藝術大学音楽学部作曲家卒業。同大学院を終了後、ベルリン藝術大学に学ぶ。現在、東京藝術大学副学長および演奏藝術センター教授、一般社団法人日本作曲家協議会会長、アジア作曲家連盟会長、一般社団法人アーツ・イノベーション・プロジェクト理事長、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会文化・教育委員。アンサンブル東風代表、カメラータ・ナガノ常任指揮者兼音楽監督。

オットー J. シャンツ (Otto J. Schantz)

ドイツ、コブレンツ＝ランダウ大学教授。専門分野は、オリンピックとパラリンピックムーブメントのイデオロギー、スポーツとダイバーシティ、文化としてのスポーツ、認識学、社会学。2004年より現職。1999年に国際オリンピック委員会リサーチカウンシルの創立メンバーとなり、現在は、編集委員としてスポーツや社会をテーマとした数々のジャーナルや書籍に携わる。

藤田 紀昭 (Motoaki Fujita)

日本福祉大学スポーツ科学部部长。筑波大学大学院体育研究科修了。徳島文理大学専任講師、同志社大学スポーツ健康科学研究科教授などを経て、現職。研究分野は、体育学、障害者スポーツ論。「地域における障害者スポーツの普及促進に関する有識者会議」座長を務め、現在、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会技術委員会副委員長。

ラシェル・ボーシェ (Rachel Bocher)

フランス、ナント国際会議センター「シテ・デ・Congre」理事長。ナント大学病院の精神科科長。全国病院臨床医連合の会長。ナント市市議会議員。仏国家功労勲章とレジオン・ドヌール勲章を受章。

小林 瑞恵 (Mizue Kobayashi)

社会福祉法人愛成会副理事長・アートディレクター。アール・ブリュット関連の展覧会を数多く手がける。中野区にて障がいのある人たちが創作活動を行う場「アトリエ pangaea」を立ち上げる。ヨーロッパ巡回展「Outsider Art from Japan」、日本スイス国交樹立150周年記念事業「ART BRUT JAPAN SCHWEIZ」展日本側キュレーター。2016年東京芸術文化評議会アール・ブリュット検討部会委員。

沼田 里衣 (Rii Numata)

学術博士。大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授。日本音楽即興学会理事。日本音楽療法学会認定音楽療法士。知的障がい者、乳幼児、小学生や高齢者と即興音楽ワークショップや公演活動を行う傍ら、技術や価値観の差異を超えた音楽作りについて研究を行う。2005年より音遊びの会代表、2014年よりおとあそび工房主宰。論文に「コミュニティ音楽療法における音楽の芸術的価値と社会的意味」（『日本音楽療法学会誌』第10巻第1号）等。

小倉 和夫 (Kazuo Ogoura)

公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンター理事長。東京大学法学部卒。1962年外務省入省。駐ベトナム・韓国・フランス大使、独立行政法人国際交流基金理事長、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会評議会事務総長歴任。

Contents

Introduction

Program

Keynote Speech

“Sports Arts Science”

Isao Matsushita, Vice President, Tokyo University of the Arts.....23

1st Session: Sports

“Is competitive sport one of the last bastions excluding persons with disabilities?”

Dr. Otto J. Schantz, Professor, University of Koblenz-Landau, Germany.....25

“The Role of Disability Sports in Japanese Society”

Dr. Motoaki Fujita, Professor, Nihon Fukushi University.....27

2nd Session: Arts

“Another Avenue for Art: a therapeutic practice, psychiatric care, in the City”

Dr. Rachel Bocher, President, La Cité Nantes Events Centre, France.....29

“Exploring the Future of Diversity from the viewpoint of Art Brut”

Mizue Kobayashi, Vice Chairman, Aiseikai.....30

“Creating a New Evaluation Axis through the Collaboration of Arts and Welfare”

Dr. Rii Numata, Specially Appointed Associate Professor, Osaka City University.....31

3rd Session: Panel Discussion33

Speaker's Profile41

International Symposium SPORTS, ARTS & INCLUSION

Outline

Date: Friday, September 29, 2017, 13 : 30 – 17 : 30

Venue: Tokyo University of the Arts, The Hall 6 (Ueno, Taito-ku, Tokyo)

Participants: 82

Organized by: The Nippon Foundation Paralympic Support Center
The COI Site, Tokyo University of the Arts
Japanese-German Center Berlin (JDZB)

Cooperated by: La Cité Nantes Events Centre
Arts Innovation Project (AIP)

Supported by: Ministry of Health, Labour and Welfare
Japan Sports Agency
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
Taito ward

Purpose

Sports and Arts play a substantial role in enjoying, learning and professional success of people with disabilities. Activities of sports and arts increase their independence and self-esteem. Also they enrich cultural and economic life of the communities. And this contributes to a drastic change in our whole society.

In the forthcoming symposium the significance of sports and arts of people with disabilities will be examined from diverse viewpoints. The question how we can further improve social inclusion of people with disabilities through activities in sports and arts will be among the main theme.

Discussing these questions on the basis of activities in both fields in Europe and Japan with comparative perspectives will help us to consider how we can build more substantial and sustainable Paralympic legacies over TOKYO 2020.

Program

13 : 30

Opening remarks

Yoko Takahashi

Japanese Member of Foundation Council, Japanese-German Center Berlin /
President, Japan Philanthropic Association

13 : 35

Keynote Speech

“Sports Arts Science”

Isao Matsushita, Vice President, Tokyo University of the Arts

13 : 55

1st Session: Sports

“Is competitive sport one of the last bastions excluding persons with disabilities?”

Dr. Otto J. Schantz, Professor, University of Koblenz-Landau

“The Role of Disability Sports in Japanese Society”

Dr. Motoaki Fujita, Professor, Nihon Fukushi University

14 : 45

Break

15 : 05

Mini Performance

“Schlagende Herzen (Beating Hearts)”

R. Strauss

“L'orgia”

G. Rossini

Natsuki Hashimoto, soprano

Yuka Takaki, piano

15 : 25

2nd Session: Arts

“Another Avenue for Art: a therapeutic practice, psychiatric care, in the City”

Dr. Rachel Bocher, President, La Cité Nantes Events Centre

“Exploring the Future of Diversity from the viewpoint of Art Brut”

Mizue Kobayashi, Vice Chairman, Aiseikai

“Creating a New Evaluation Axis through the Collaboration of Arts and Welfare”

Dr. Rii Numata, Specially Appointed Associate Professor, Osaka City University

16 : 25

3rd Session: Panel Discussion

moderated by Kazuo Ogoura, President, the Nippon Foundation Paralympic Support Center

All the Speakers

17 : 25

Closing remarks

Kazuo Ogoura

Sports Arts Science

Isao Matsushita

Vice President, Tokyo University of the Arts, Japan

It is now less than three years to the 2020 Olympic and Paralympic Games. As a country founded on culture, Japan must spotlight the meaning and value of peace for the world to see. The Tokyo 1964 Summer Olympics were an occasion to highlight Japan's remarkable recovery from the war and its prominent position in the world, the Sapporo 1972 Winter Olympics were filled with excitement with the success of Japan's "Hinomaru Squadron" in the ski jumping event, and the Nagano 1998 Winter Olympics and Paralympics were significant for me personally. At the Nagano Olympics and Paralympics, I was directly involved as a musician to compose an opera for the cultural program, which was performed with grandeur with the participation of the people of Nagano, as well as the Olympic march for the opening and closing ceremonies of the Olympics. It gave me great strength in my life to have been able to participate as a composer not only in a sporting event, but also in a cultural festival. As a member of the Culture and Education Commission of the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games, my hope is to pass down the experience and excitement of Nagano to the younger generations.

The sporting world, which developed under the motto "Faster, Higher, Stronger," is today embracing another concept of "more beautiful." It is starting to turn its attention to the world of beauty, and more and more competitions are focused on the pursuit of artistic merit. This year, Tokyo University of the Arts (TUA), which explores the world of beauty, will be celebrating the 130th anniversary of its foundation. Under the motto of "TUA that Ventures, Art that is Inspiring, Moving, and Exciting," we hope to further engage in artistic activities that nurture people's mind towards 2020.

The title of today's symposium is "Sports, Arts & Inclusion." Through our university's artistic activities with people with disability, I have met many exceptionally talented people with disability. They were putting all of their efforts into expressing how wonderful it is to live. In the hope of introducing their talent to more people, we began a program called "Disability and Arts" six years ago. Last year, we invited a Chilean guitarist who had lost his right arm and who had developed his own technique to become a professional guitarist. For the last several years, we have been organizing performances that unite the performers and the audience under the theme, "Color that is Audible, Sound that is Visible."

This activity is led by the Disability and Expression Team of Tokyo University of the Arts Center of Innovation (COI), which is a university-industry-government research institute.

At the Tokyo University of the Arts COI, the 2020 Team is exploring new culture towards the 2020 Olympic and Paralympic Games, integrating Japan's science and technology, arts, and sports in pursuit of new ways of expressing beauty. At the Summer Arts Japan that began in the summer of 2016, we attached sensors to

gymnasts to monitor the movement of their muscles. The data were then transformed by AI real-time to allow the piano to play music, alongside the orchestra. This meant that the gymnasts were, through their movement, playing the piano with the orchestra. We think that this could lead to a variety of new developments, such as new forms of artistic expression by athletes as well as the use of the technology in children's sport education and in the field of nursing care by, for example, providing joy of life to the elderly by producing music accompaniment when they walked.

This year, we had a joint performance with wheelchair badminton athletes. The movement of their arms was converted into sound to further develop new possibilities. In the future, we hope to explore, in addition to sound, new spatial expressions using color to create new excitement in disability sports.

What needs to be done now towards the Tokyo Olympic and Paralympic Games that will be held three years from now? I think it is to create a world in which all people of this world can express the joy of life and **share excitement and inspiration** and in which the children who will shape the future world can freely dream of a better world to come.

Is competitive sport one of the last bastions excluding persons with disabilities?

Dr. Otto J. Schantz

Professor, University of Koblenz-Landau, Germany

In most social fields like education, employment, leisure, culture, etc. our democratic societies make great efforts in order to include people with disabilities. More than 170 states have already signed the Convention on the Rights of Persons with Disabilities, an international human rights treaty adopted in 2006 by the United Nations General Assembly guaranteeing the social inclusion of persons with disabilities.

If we have a look at the field of sports and physical activities, we can find a lot of actions, engagements, and projects designed to include persons with disabilities. However, these efforts of inclusion are more or less limited to recreational sports, physical education, or sports for all. At the high level clear distinction between and classification in able bodied and disabled sports persist. The most prominent example of this division is the strict segregation between Olympic and Paralympic Games. The binary categorization of these events can be considered as a marginalization or even an exclusion of athletes with disabilities, as the Olympics will probably always be the most prestigious category, almost inaccessible for them.

The structural goal of competitive sport consists in classification and ranking according to athletic abilities in order to select and honor the very best, while, in opposition to this, the concept of inclusion brings together and values diversity and respects (dis-)ability. The main ideology of competitive sport is ableism, a notion used by disabled activists to refer to “the sentiment of certain social groups and social structures that value and promote certain abilities, for example, productivity and competitiveness, over others, such as empathy, compassion and kindness” (Wolbring 2008, 253). Competitive sport is a kind of social Darwinism in the arena: it promotes the survival of the fastest, of the strongest, of the most able and most skillful.

Considering these contradictions between high level sport and inclusion it seems evident that competitive sport is incompatible with inclusion and forms one of the last bastions against it. Nevertheless, there have been different attempts to take this bastion, some rare were successful, some others are controversial and still vividly debated.

In my presentation I will discuss this segregation between Olympics and Paralympics and the problems of the apparent incompatibility between competition and inclusion in competitive sports drawing on perspectives and concepts from philosophy/ethics, disability studies, sport sciences, and history. In order to illustrate my reflections I will consider some special cases like Oscar Pistorius, the first sprinter to run in the Olympics with prostheses, Markus Rehm, an unilateral amputee who jumped 8.40 m, or Natalie du Toit, the first amputee to swim in the Olympics. Athletes with disabilities who want to compete at high level in able-bodied competitions are confronted to a lot of obstacles and resistance: when compensating their disabilities by technical devices, they are confronted with the reproach of technical doping and unfairness; without artificial aids, they are in general not competitive.

If we want to include athletes in high level competitive sport which is characterized by the logic of selection

of the very best – and which still tries to defend the (mythical) sport values of equal chances and natural performances, prohibiting compensatory technical devices or artificial aids, we have to adapt existing sports and invent new sports. These modified sports or new sports should be accessible for all, able-bodied or disabled, and offer to everybody, as far as possible, equal opportunities of participation and winning (Schantz & Gilbert 2012). Some concrete examples of accessible sports will be presented and discussed.

In the 21st century we should adapt sports to the diversity of humans in order to fit the ethical standards of our time and not adapt humans to sports invented in the 19th century for the Western and able-bodied male athlete (Schantz 2016).

References:

- Schantz, O. J. & Gilbert, K. (2012). The Paralympic Movement: Empowerment or Disempowerment for People with Disabilities? (pp. 358-380). In H. Jefferson Lenskyj & S. Waag (Eds.). *The Palgrave Handbook of Olympic Studies*. New York: Palgrave.
- Schantz, O. J. (2016) : Coubertin's humanism facing post- humanism – implications for the future of the Olympic Games. *Sport in Society* 19/6, 840-856 (<http://dx.doi.org/10.1080/17430437.2015.1108653>).
- Wolbring, G. (2008). The politics of ableism. *Development*, 51 (2), 252-258.

The Role of Disability Sports in Japanese Society

Dr. Motoaki Fujita

Professor, Nihon Fukushi University, Japan

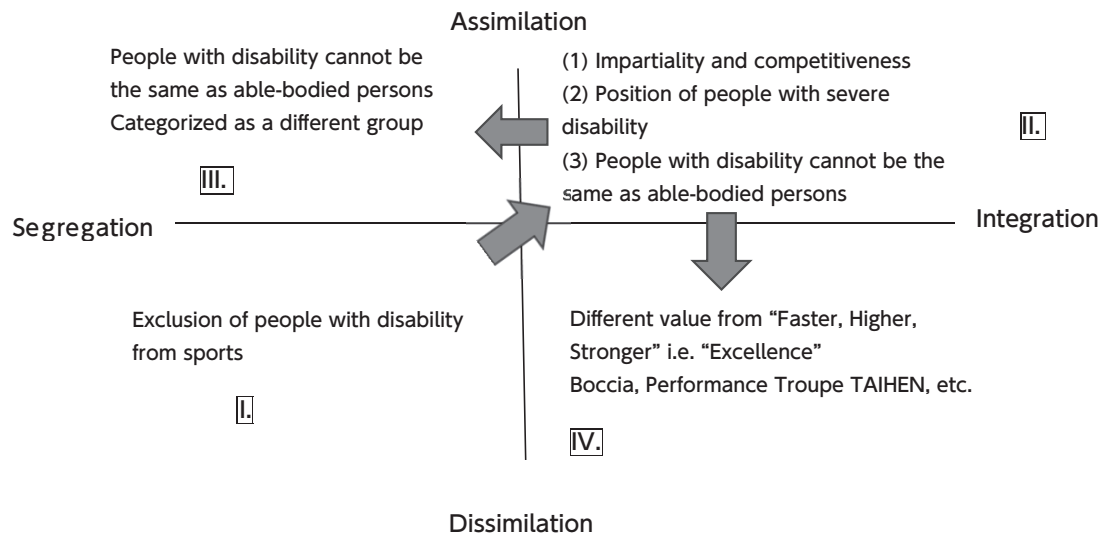
The following Figure shows disability sports in four quadrants formed by the two axes of “assimilation-dissimilation” and “segregation-integration.” Assimilation means for two groups of people to share the same set of values. Dissimilation means for two groups of people to have different sets of values. Segregation means for two groups of people to identify each other as different and become separated into two different worlds. Integration means for two groups of people to identify each other as being the same and reside in a same world.

Previously in Japan, disability sports were regarded and treated as different from sports of able-bodied persons. The Ministry of Health, Labour and Welfare was the supervising authorities for the former, and the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology was the supervising authorities for the latter. Sports facilities did not consider the needs of people with disability, and the use of such facilities by people with disability was denied for a period. In other words, the two groups of people were regarded as different, and they belonged to different worlds, as illustrated in Quadrant I (dissimilation - segregation) in the following Figure. Today, both disability sports and non-disability sports are under the supervision of the single authorities of the Japan Sports Agency. Expectations are rising for Japanese Paralympians winning just as many medals as Japanese Olympians at the Tokyo 2020 Olympics. That state will be represented by Quadrant II (assimilation - integration) in the diagram.

Attempts to assimilate disability sports into the Olympics, however, may have an opposing effect of highlighting differences in the performance or records of disabled athletes and able-bodied athletes. If disabled athletes outperform able-bodied athletes in Olympic sports, people may think that disabled athletes are not competing in the same sports due to their use of prosthetic leg or wheelchair. People with severe disability, who are in a difficult position to pursue the Olympic value of “Excellence” at the same level as other athletes, may be excluded from the Olympics. This situation is represented by Quadrant III (assimilation - segregation) in the Figure. Quadrant IV (dissimilation - integration) stands on the assumption that people are different and accepts those differences. In this sphere, the standards of beauty or what makes the human body valuable are not one but many. Higher value is not necessarily given to those who possess economically more productive or higher performing bodies. It essentially accepts that there could be diversity of standards. It accepts the diversity of values.

To bring about an inclusive society that Japan and the Paralympic Movement aim to achieve, it is necessary to understand and embrace the state represented by Quadrant IV. This is also important in order not to confine the Paralympic Legacy to those people with disability who are engaged in sports and in order to prevent exclusion of people with severe disability.

Figure. Integration of Disability Sports



Source: Prepared by the author based on Ishikawa (2000)

Another Avenue for Art: a therapeutic practice, psychiatric care, in the city

Dr. Rachel Bocher

President, La Cité Nantes Events Centre, France

Art can be a social transformation and a sublimation between the work of art and a symptom and will question the subject, whether the subject is a person who is ill or not. Art also makes us question the relationship between the personal and the collective, and casts new ways of living together.

What heals, and what is effective in artistic and cultural practices, is the free play of creativity rediscovered by the subject. This can also be referred to as an integration into citizenship. With this concept, the care that I am responsible for has evolved as a practice which does not alienate, fully immersed in society through the creation of cultural workshops including the Slam workshop, a new form of poetry.

I will illustrate my comments - how healing becomes part of an artistic activity - through the Slam workshop which involved young patients in their twenties, facing crises of depression or suicide.

I will address the definition and principles of Slam before discussing the therapeutic effects of the workshop. Moreover, we have identified 4 therapeutic axes: sports demonstration events; playing with words; working on connection and emotions; and returning to the self.

Then, I will present a short 5-minute film retracing this activity of artistic mediation.

In conclusion, I will discuss our Japan-Nantes event, a major and unique event in October in Nantes. This event includes an Art Brut exhibition, Japanese events featuring among others theatre, dance, and dragons, in conjunction with a scientific conference, 'Art, Healing, and Citizenship'. Our Japan-Nantes event is also above all a prelude to the 2020 Paralympic Games in Tokyo. I invite as many of you as possible to come to Nantes for this unique Japan-Nantes event from October 21st to 25th, 2017.

Exploring the Future of Diversity from the viewpoint of Art Brut

Mizue Kobayashi

Vice Chairman, Aiseikai, Japan

This presentation will focus on a growing interest in Japan and abroad in Japan's Art Brut, or outsider art, from around 2008, and its impact on changing society. By communicating the potential and diversity of human expression through art and providing opportunities for diverse people to realize their full potential, regardless of disability, it is possible to bring about change in society's values. This presentation will consider what is needed to bring about such change.

Art Brut, which is a French term that literally means "raw art," encompasses original works of art created by artists without formal art training.

Japan's Art Brut (hereafter abbreviated as "AB") has attracted international acclaim and attention. In 2010, the Art Brut Japonais exhibition in Paris, France, attracted 120,000 visitors in ten months, and was awarded a medal of art and culture by the mayor of Paris. After the exhibition in Paris, the touring exhibition of "Art Brut Japonais" was held in Japan, widely spreading the knowledge among the general public about how wonderful Japan's AB is. This success prompted the government and the private sector to actively support AB.

AB works impressed many and took the world by surprise. What effect these developments have had on people with disability? Obviously, it expanded the sphere of activities for AB artists, but more importantly, it demonstrated that "art and culture can be a catalyst in bringing about change in society." There is still deep-seated prejudice against people with disability, but AB has the power to change it. It is the power of art.

A project is being carried out to promote urban development through art and culture in collaboration with Nakano shopping district in Tokyo. The main message of this project is not one of "Supporting people with disability for the benefit of society," but one of "Creating a society that makes it easier for diverse people to live in," one that touches on and has relevance to all people. Participants to the project are not confined to those working in the field of welfare, and include people from a wide range of fields. AB, with its diverse artists, is an excellent tool for communicating the importance of respecting diversity in society.

Because discovery of AB in Japan started in the field of social welfare, many AB artists in Japan are disabled. However, AB is not the same as disability art. What makes AB appealing is the diversity of artists and expressions that portray the power of human life and potential for creativity. AB can be approached and utilized from a range of different angles. It is my hope that not only people in the field of social welfare, but also those in education, art, business, government, and many other industries and sectors become actively involved in AB in the future.

Creating a New Evaluation Axis through the Collaboration of Arts and Welfare

Dr. Rii Numata

Specially Appointed Associate Professor, Osaka City University, Japan

This presentation will identify main issues related to musical performances given jointly by people with and without disability, present some of the achievements from such efforts, and discuss approaches to enable people with different artistic value build new relations through dialogue on the musical aspects of the performances, and to discover a sense of belonging.

1. Performing Together: Communicating with each other through music

- In music, there is a possibility for people of different age, race, skill, culture, and sense of values to play music together and further to perform on the same stage.
- When players of different skill perform together, there emerges within the musical performance relations where one person is teaching and the other person is being taught, one person is supporting and the other person is being supported, or both try to find altogether different, new skills.

2. How can players of different skill levels or values perform together?

- When performing preexisting music, the performers may sometimes find it difficult to fully express themselves artistically.
- There are two sides to this problem. One is the stereotypical idea that people might have that attach value only when the music is played in the preexisting manner. The other is the notion that sees beauty in people with disability making the effort to participate in society.

3. What community music therapy attempts to do

- In the field of music therapy, improvised music and various other methods have been developed to enable collaboration with people with difficulty. “Music therapy has been challenging the existing closed notion about ‘What is music? Who can or should participate in music?’” (Stige, B. et al.: Where Music Helps. Ashgate, 2010).
- Recent discussions over “community music therapy” explore relations that fall outside the existing therapist-client relations and approaches different from goal-oriented activities that aim to bring about change in the client.

4. Musical activities exploring improvisation and creativity

- Outside the field of music therapy, the following musical activities explore improvisation and creativity:
 - SALSAGUMTAPE: A rock band in Yokohama formed in 1994 with people with disability.
 - otto & orabu: Two groups formed in 2001 at Shobu Gakuen in Kagoshima. One performs with ethnic instruments, and the other is a choral group employing shout.

- Otoasobi no Kai: A group organized by the author in Kobe in 2005. Members are people with disability and musicians specializing in improvisation.
- Otoasobi Kobo: An exploratory group started by the author in 2014 without setting any distinction between people with or without disability.
- Konton: An informal network of people with mental disability active from 1997 to last year in Tokyo.
- Each group uses distinctive approaches to set performances and venues to help all participants vibrantly express themselves.

5. Changes in participants with disability and society (from the example of Otoasobi no Kai and Otoasobi Kobo)

- These efforts brought about changes not only in disabled participants, who grew more confident about expressing themselves on stage, but also in various other persons involved in the performances.
- Example: Some musicians said that the experience helped to widen the range of their musical expressions. Some participants learned to see the situation within the overall phenomena. The interest of those from outside the group shifted from interest in the changes that music therapy and performances had on disabled performers to interest in the musical expression itself.
- Such changes were facilitated by lighting and stage setting and by the selection of non-disabled performers (artists, comedians, udon noodle manufacturers, farmers, etc.).

6. Creating a new evaluation axis

- When thinking about social participation of people with disability through musical activities, the setting of the stage and the venue is an important consideration. The setting should enable the audience to fully enjoy and appreciate an art form that falls outside the existing norm.
- One of the audience commented, “I was apprehensive at first about seeing people with disability perform on stage, but the actual experience of seeing them perform was actually enjoyable and made me aware of a new dimension of music that I had not been aware of before.”
- Contrivances are needed to allow light to be shed on the artistic expression of each performer and avoid rejection of their expression as something strange and unfamiliar in contrast to the existing norm.
- To avoid such rejection, dialogue, on the musical aspects of the performances, is needed, in all phases of preparation and promotion, with the venue providers, non-disabled performers, caregivers, parents, and others who do not necessarily share the artistic value of the performances.
- Such efforts will help the participants, including those with disability, to build new relations through music and a sense of belonging within society.

Panel Discussion

Moderator: Kazuo Ogoura
Panelists: All the Speakers

Ogoura: Let's begin the panel discussion. Dr. Bocher, French people are characteristic in their individuality, and I believe individualism is given much weight by the French.

In Japan, recently, many people say that having a disability is a part of individuality. Is that really the case? Is disability part of a person's individuality? If so, it ought to be something that is advertised because it is part of a person's uniqueness.

After having heard today's presentations, having a disability may actually relieve a person from the bounds and constraints of traditional rules and bias. If that is the case, having a disability can actually be an entry point to freedom. Can we think of disability as a part of individuality, Dr. Bocher?

Bocher: I think that there are several stages in recognizing a human being. Perhaps there are three stages.

The first stage is, even if you are disabled, you are still a human, and in that sense, having a disability is like that person's business card.

At the second stage, the disability is a chance, a possibility.

And then there is the third stage, about living together. As we discussed throughout this afternoon, art and sports are a way of developing relationships among people and enabling people to live together. I am repeating what I said, but whether you have a disability or not, you are human, and to understand that I have shown you "slam" (poetry reading).

Ogoura: Thank you very much. I'm male. Is being male part of my individuality? That is also another aspect. I would like what we heard from Dr. Bocher just now to be a basis for our discussion.

Next, I would like to ask Dr. Numata. Prof. Otto Schantz spoke about the competitiveness in competitive sports, that without competition, competitive sports would not be what it is, and that how we think about the principle of competition is one of the challenges of contemporary society. Unlike sports, I don't think there is always competition in art, but if there is a lack of competition, there is a danger of people becoming complacent. When I see the world of disability art, there are wonderful works, but there is also an element of people becoming complacent. I don't think this is not only about disability art but also about art in general. How should we think about the principle of competition in art?

Numata: It's a very difficult question. Let me try to answer. We need to look at what the competition is centered on, and what relationship its evaluation is based on. That is how I now see it. There are many things that competition can be centered on. When coming into contact with people with disabilities, and trying to create a stage performance together, the set of values that you had, and considered were good, may not work.

People with disabilities sometimes are not good at working within common principle of competition, and some people fall asleep on the stage, some cannot participate on the stage, and cannot play a rhythm. With this basis of evaluation, it just does not become a competition, but it's possible to discover that there are many very attractive elements there.

For example, we could not keep people quiet in the beginning and it was a large problem for us, so we tried to think of many ways to try and get people to be quiet. But all that did was to create a negative atmosphere. It was as if we were given a question in return, and it made us question why we thought it was necessary to be quiet. When we stopped trying to get people to be quiet, things worked very well. That became a unique aspect of the Otoasobi Project mentioned earlier. There is enjoyment and joy in discovering something new in this way. We imagine how to develop a stage performance that takes it beyond something to be complacent about. There is the artists' creativity, ideas to think about together, and we can borrow from artistic methods to find ways to make it an interesting performance. I think that is where the possibilities of art are.

Ogoura: Thank you very much. Art Brut and the various works Ms. Kobayashi mentioned are more easily accessible to the general public compared to so called works of art. You spoke about exhibiting Art Brut in local areas to revitalize the community, and because of ties to local people. Do you think that Art Brut has closer ties to local communities than ordinary works of art, or that it is more directly approachable and more easily accepted?

Kobayashi: Yes, I agree. I think it is a characteristic of Art Brut that the creator of the work often doesn't aspire to become an artist. Many create because they want to, for their own enjoyment. To understand what it means to create without intending to become an artist, for example, Art Brut creators do not decide to make a work of art. They neither go to a shop specializing in art to gather nor use special materials. That is why we frequently see in audience responses to questionnaires at Art Brut exhibits that people felt "it was accessible". I think that is due in large part to artists using materials from their daily lives. There is a surprise that something that excels in creativity can be made from familiar materials. The artist could be your neighbor. Even if there would be a person who is being gossiped because of his/ her strange behavior, they could be creating something that no one else can make or imagine. If you could have a chance to appreciate such works, you may change your perception about those people. Someone discovers that an elderly people in the neighborhood, and a person with disabilities who they know, are creating something that is striking or awe-inspiring. Art Brut is the art that exists in our daily lives.

And because the creators are not aiming to become an artist, if they get bored, they quit. With artists who create buildings, in a few years a building may be dismantled because it was against the building code. This ephemerality also makes it interesting. Through the artist, conversations start with people in the community, with people saying, "Oh, I know that," or "That's really amazing."

The word "Diversity" includes different things for different people. I of course consider people with disabilities a part of diversity, but the other person may not include people with disabilities within diversity.

The value that defines "living together" tends to be kept within the perception that we live together with people we already know. We, however, need to broaden our perception as that the people is beyond one who we meet in person or who are part of our lives. There are so many different kinds of people in our society.

When an art exhibit is taken place in the community, these connections happen, and the awareness how diverse the world actually is, keeps on telling. That is one of the roles Art Brut plays, I think.

Ogoura: Prof. Matsushita, you must have many comments on what the panelists have said so far. Please go ahead.

Matsushita: Well, I work at this university and there are what might be described as many unusual people, probably including myself. A disability, or being unusual or not, is I think all a matter of degree. I wear glasses because I have a disability, difficulty seeing. For example, it is the same for back pain. When it becomes severe and restricts movement, it is called a disability.

The same with competition, although to a different degree for us. If there is no competition, people will not grow, but if there is too much competition, competition becomes the goal and weakens your sensitivity. Everything is about balance. Artists believe in pursuing their own path regardless of how others evaluate them. Without that, their aim becomes to be easily understood and appealing. But we are recently seeing some changes here at Tokyo University of the Arts. There are more students who want to become employed and live an ordinary life. So I believe that everything, including disabilities, is about there being only differences in degree or balance.

In that sense, I feel that people with disabilities have a wealth of ideas. Now that diversity is being accepted, more people are able to express themselves, and I believe the level of understanding has changed and become deeper. As we look towards 2020, having a diversity of people will change our sensitivity. We will change each other, and I believe that society is developing towards changing into an easier place to live. On the other hand, there also exists a strong power to follow one's path, working through very strict competition, and to be at the forefront, as we see with the soprano Ms. Natsuki Hashimoto.

Ogoura: I would like now to turn to the area of sports. Prof. Schantz, Prof. Fujita mentioned examples of athletes like Markus Rehm and Oscar Pistorius.

For a long time until now, traditionally, the equipment used by people with disabilities has supplemented a function, to bring them as close as possible to the level of an able-bodied person. It is the same with the glasses that I use.

But the meaning of equipment has changed, for example in Oscar Pistorius' case, and not only does it supplement physical functions, but it has a new capability of exercising a special capacity or skill.

So for disability sports, it seems the meaning of equipment has moved beyond supplementing physical functionality, and is acquiring a new meaning. I would like to ask Prof. Schantz how we should think about the meaning of sports equipment in disability sports.

Prof. Dr. Otto Schantz: Thank you for this interesting question. Paralympic sports rely to a great extent on technology. The problem with technology is that it was previously used as a form of treatment, but now it is a means of enhancement, and the difference between remedy and enhancement is becoming blurred. Replacing an amputated limb by prosthesis was done as remedy and treatment, to replace the leg. But now the prosthesis may be more highly functional than the original flesh and blood leg.

In 1999, at a conference in Barcelona in Spain on sports and disability, I stated that in the future, athletes with prosthetic legs may run faster than able-bodied people. Most of the audience laughed, thought that it must be a joke, that it will not happen. Eight years later, Oscar Pistorius won a silver medal in the South African athletics championship with his prosthetic legs.

I think there will be a lot of progress in this technology. There is an enormous progress in different technological fields called NBIC. These are in addition to material science, the fields of nanotechnology, biological technology, information technology, and cognitive sciences. I think the convergence of all these technologies will allow to enhance human beings and the human race in the future. Especially in the Paralympics, we will probably see athletes with disabilities outperform able-bodied people.

Two years ago, a seventeen-year-old girl from Scotland who had one leg amputated, began to say that she would like her remaining leg amputated. She said that it was in order to run faster. It was because she had heard that with amputations on both legs, under the knee like Pistorius, it's easier to run. She wanted her other leg amputated in order to use two prostheses and be able to run faster.

I think there will be a lot of progress. I think for people with disabilities, it is an opportunity, a possibility for empowerment. If the minority became more powerful than the majority, it would be tremendous empowerment for the minority.

2016, for the first time, there was the Cybathlon in Zurich. It is similar to the Paralympics, but the use of all kind of technological assistance systems is allowed. Interfacing with artificial intelligence is used, and various machinery is used to support people with disabilities, and they compete using these machines. I don't know what we will see in the future, but I think there will be a big change.

Ogoura: In the Deaflympics, the use of hearing aids is prohibited. What about in the Paralympics? Do you think that there will be rule-making in the future that prohibits the use of a specific technology, or equipment that exceeds a certain level in capacity?

Schantz: It already exists. There are restrictions in the Paralympics, for example, on the length of prosthetic limbs. There are specific rules that already exist, but rules can be changed, so I don't know what will happen.

Ogoura: We have to think about technological progress and how it can shape the Paralympics. I would like to ask Prof. Fujita a question that's in everyone's minds but is also the most difficult question.

Gold medalists or artists with disabilities who have become very famous, are no longer a person with disabilities, but an artist and a medalist. In other words, people who have extraordinary results or achievements, and who have in a sense overcome disability, aren't they for the ordinary person with disabilities, someone who is not the same, a different kind of person?

As it is often pointed out, no matter how splendid the Paralympics are, it doesn't lead to ordinary people with disabilities participating more in sports. This has been said based on various research. In other words, in training the elite, be it artists or sportsmen or sportswomen, what happens to what might be referred to as the bottom of the pyramid? Will developing the people at the top encourage everyone to engage in sports, art, participate in artistic activities? If the mountain keeps on becoming higher, does the base of the mountain also expand? This is a frequently-asked question.

Fujita: Thank you for this extremely difficult question. I would like to answer based on the results of previous research that I conducted, and on what has been said by others.

First, when you ask people the question, “What encouraged you to begin sports?” -this is an issue of socialization that is often mentioned- and when you ask who was the person who encouraged it, able-bodied people for example if they are male, answer an older brother if they have one, or their father, or an older person of the same gender. For women, it is their mother, or an older person who is female.

In the case of people with disabilities, the results of my research show that people were most strongly influenced by another person who also has a disability. There is a difference between family and brothers and sisters, and friends with disabilities, but on reflection, what the results show is that the role models are people who have similar physical conditions.

So it's important to develop the elite, and it's important that they become a role model. But as Mr. Ogoura said, that's not enough. Even if people see others with disabilities at the top level, they feel it has nothing to do with them, that these are people at the top level who are therefore different, that it is not possible to do the same thing. There are many people, especially in Japan, who think this way.

When it is someone closer who, for example, goes with them to a sports facility and they play together and have a good time, only then does it encourage them to begin sports. The people at the top, as role models, can show what is possible, and people who are closer, someone you know, can invite the person to try it out. Of course, if someone at the top level can come and invite you to participate, that might be the best, but what is important is that there is a virtuous cycle, that top-level athletes and people who have not yet played sports are engaged in a virtuous cycle.

For that virtuous cycle to happen, there will be a need for local community support, and various government policies. In the case of Japan, that would be for example the Social Welfare Council or the Education Board. There are many possibilities, but those organizations could coordinate and collaborate to think about policies and encourage people to begin playing sports.

So just showing top athletes in the media is not going to encourage people into action. When there are various policies to fill that gap, people with disabilities can also begin playing sports.

If you make curry and tell someone to eat it, it's not enough. It is when you show them how to warm up cooked curry, pour it on rice, and help them with their first spoonful, that the person will experience the good taste. It is the same thing.

Ogoura: Now, I would like to have a free discussion, and let me propose one or two questions, but please do not to limit your comments to those questions, and feel free to comment on what has been discussed so far.

One is commercialization, and how to think about it. Many people are of the opinion that art and sports for people with disabilities, compared to art and sports for able-bodied people, always fall behind in becoming commercialized. For example, with Art Brut, how do you define intellectual property rights?

And on the other hand, the more you commercialize, there are positive aspects, but in terms of encouraging many people to participate, it may not work well. My question is, what are your views on the commercialization of sports or art by people with disabilities.

My other question relates to the fact that sports cannot exist without the body. Perhaps it's not possible to say no sports have the possibility of existing separated from the body, but usually sports do not exist separate

from the body. Art does exist separate from the body. What I mean, is that music composed by Prof. Matsushita can be played without Prof. Matsushita being there. A painting by an artist with a disability exists as a work without the presence of the artist.

In other words, disability art exists separate from the body or the person, but with sports, it is difficult to imagine it existing without the human body. Does this difference mean that when we think about the relationship between disability art and society, or disability sports and society, there is also a difference? Would anyone like to comment, not just on these questions, but it can be on what has been discussed here so far.

Schantz: I would like to comment on your question on commercialization. It relates to what Prof. Fujita said, but the Paralympics are becoming more and more professionalized and commercialized, and focused on the elite of the disabled community. The problem is that the gap between the ordinary person with disabilities and the Paralympian is widening. Something that is often expressed by people with disabilities is, "These people are not representatives of the community of people with disabilities. They are far away from us, and represent a small percentage of elites. They are not role models." I think this is what the majority of people with disabilities think. In general, most people with disabilities do not practice sports, and do not consider these people as role models.

That's why, as I explained in my presentation, this elite needs to be integrated into the Olympics, and the Paralympics need to become something broader. It should be an event that athletes with severe disabilities, for example, can participate in. It needs to be open to people with severe disabilities, and accessible to such people.

Bocher: This is a very complicated question. We have an answer in October, at Nantes. It will be one of the themes of the symposium, and I'd like to invite you to come to Nantes to discuss this question. But I have to answer the question.

There are two levels. The first, is that people with disabilities should not depend on welfare. If they are going to be recognized as a person, even if they have a disability, the same rules should be applied. And works of art can be commercialized, or become a commercialized product.

On another level, I'm a woman, but at the same time I'm also a psychiatrist. When we look at a work of art, I think we should look for the intention of the work. We should think about whether there is an intention or not. When we look at this aspect, there is a relationship between artistic creation and symptoms, such as with depression. So we need to look at a person as a human being, whether they have a disability or not, and whether or not there is an intention in what they create. If there's an intention, we need to look at why they are doing it. Van Gogh is a famous painter, but he was a person with a disability.

Fujita: I would also like to comment on commercialization. Whether a value is discovered, and is paid for, is decided by society. With disability sports, people have begun to recognize that kind of value. Especially after Tokyo became the host city for the 2020 Paralympics, many companies are hiring athletes with disabilities, athletes are appearing on advertisements, and many other things are beginning to be done. So I think commercialization will progress in the same way as with Olympic athletes.

But one thing I would like the athletes to understand, is that especially with the Paralympics, one of the main goals is to provide an opportunity for sports from children to the elderly, and from beginners to top-level athletes. The more elite an athlete, the more this needs to be part of their awareness. Earlier, I described a

virtuous cycle. They need to remember the person they were before becoming top-level athletes, and it should become, I wouldn't say an obligation, but essential for top-level athletes to understand that they have the responsibility to create opportunities for people who do not play sports or who don't feel comfortable playing sports. This is easy for able-bodied people. If they want to do that, it can be done anytime. For athletes with disabilities, they need some support. The more highly valued, commercialized, and profitable an athlete, the more they need to be aware of this. I hope that this will become the case.

Matsushita: I think what motivates people to live is aspirations and dreams. For example, also in sports, there can be a top star, but will people aspire to be like that person? Rugby, for example, was not very popular in Japan until Japan won against South Africa, but now children have started to play rugby. It is a reflection of how things can quickly become a boom in Japan. The same with soccer. The mass media also has a large effect. It's about creating a history. Not only was the athlete exceptional, but the athlete's background was also in a way commercialized successfully. In this sense, I hope the same will happen for Paralympic athletes.

But I think there are things people can and cannot do on their own. For example, it might be possible to experience using a wheelchair, but becoming a wheelchair athlete is a different thing. There are clear differences in category. But then there is the example of Boccia, mentioned earlier, that has spread unexpectedly as people began to see that children could also play it.

It is the same with works of art and other things. Mr. Sawada is an example of how a top star was born, and was featured in the media. The point is not whether that makes people want to or not want to start something, but that there is more understanding about that person. So there are very important aspects to creating a star who we adore. But if there is too much focus there, it becomes too popularized, and what genuine is, will be lost. It's the balance I mentioned earlier. Now, towards 2020, we should focus on giving people things to aspire to and dream about. It will probably often be a star, or their work.

In terms of commercialization, we are also working on and clearing legal and copyright issues as is Ms. Kobayashi, but I think the issues to do with commercialization are the same. Van Gogh was mentioned earlier. Many artists, as I said at the beginning, are unusual in some way, but whatever they are dealing with, they do not abandon their dream. The guitarist that I introduced, he never gave up his dream. People who have an intensity and do not give up on their dream are the ones who reach the top, and become a story to tell. So I believe in fostering a dream and considering commercialization at the same time. What are your thoughts, Ms. Kobayashi?

Kobayashi: It's important to keep a dream. Those who continue or those who complete something, are the ones who win. People who continued with the same thing for decades, for example Mr. Shinichi Sawada continued with that spiky form for a long time, and is now attracting global attention.

On the issue of commercialization, as Prof. Matsushita mentioned, I think it is a very important perspective as a new way for social engagement for people with disabilities. It is important to have the necessary support ready, and to create a future, where people with disabilities are active in the world of art.

Among artists who are currently active, there are some who can express their wishes, but others, for example Mr. Sawada at the Venice Biennale is autistic, and cannot decide which works to sell or not sell and at what price. Artists with disabilities need someone who can protect their interests so that they are not exploited.

The legal support is in the process of being organized. I think not just people's understanding but also different systems of supporting people are necessary. I hope we can work on those elements and create a society where many people can be active.

I've been focusing on Art Brut, but I'm not saying Art Brut is the only way. It is important that Art Brut becomes a trigger to bring about many different discussions. That includes people visiting an exhibit and saying, "This isn't Art Brut." "This artist is more suitable for modern art, or creating manga, or designing goods." etc. I hope it becomes a way of getting to know the person, and generating discussions, and building a system where different kinds of people can be active in many ways.

Numata: I began in music therapy, and in this area, for instance Brynjulf Stige who I mentioned earlier said that we should be very cautious about commercialization, of things being separated from the person, away from their will, and sold as merchandise. But he is not rejecting commercialization. I understand that. We need to think very carefully about the consequence of product commercialization in terms of who, at what stage, is enjoying what kind of merits.

With the Otoasobi no kai, they have experienced appearing on TV, making a CD, leading to a documentary film, and having young film writers use the music, and TV shows using the music as soundtrack. Are they the members with disabilities aware? Some don't understand at all, some are very happy at the exposure, some are not but have made the people who are close to them and support their lives very happy. It takes on meaning in the context of many different relationships. We need to look at the whole picture, including how the money from commercialization is shared and by whom. It is not a bad thing, but we need to look at it cautiously.

Ogoura: We would like to conclude this panel discussion, and thank you all for your participation. [*applause*]

Speakers' Profile (in speaking order) as of September 29th 2017

Isao Matsushita

Vice President of Tokyo University of the Arts and Professor at Performing Arts Center. President of the Japan Federation of Composers, the Asian Composers League and the Arts Innovation Project. He is a member of the Culture and Education Commission of the Tokyo Organising Committee of the Olympic and Paralympic Games. He is also a representative of the Ensemble Kochi and the resident conductor/ music director of the Camerata Nagano. M.A. from the Tokyo University of the Arts and studied at Berlin University of the Arts.

Otto J. Schantz

From 1988 to 2012 he was within the University Marc Bloch in Strasbourg, France. Since 2004 he has been Professor of social sciences within the Institute of Sports Sciences at the University of Koblenz-Landau, Germany. He was a Founding Member of the Research Council of the International Olympic Committee and is an Editorial Board Member of different journals and book series on sport and society. His main research interests are the ideology of the Olympic and Paralympic movement, sport and diversity, the extraordinary body, sport as culture, epistemology and sociology of sciences. He authored and edited numerous books and articles concerning the Olympic and Paralympic movement: he is for example co-author of the history of the IOC: "The International Olympic Committee - One Hundred Years" (Lausanne 1995) and co-editor of "Paralympics – Empowerment or Side Show" (Maidenhead, UK 2008).

Motoaki Fujita

Professor and Dean of Faculty of Sports Sciences, Nihon Fukushi University, specializing in physical education and the study of Para sports. M.S. from the Tsukuba University Graduate School of Health and Sport Sciences. After working as full-time Lecturer at Tokushima Bunri University and Professor at Doshisha University, then current post. Chaired the advisory board on promoting disability sports in community to the Japan Sport Agency, and serves as Vice Chairman of the Technical Committee of the Japanese Para-Sports Association.

Rachel Bocher

President of the La Cité Nantes Events Centre, Head of the psychiatry department at Nantes university hospital and President of the national inter-union of hospital practitioners. She is also Community Councilor and a Councilor Representative for welcoming new residents to Nantes and at French-speaking countries, at conventions and exhibitions, she also represents the public life of Nantes. She is Chevalier of the National Order of Merit and the Legion of Honor. Last publication: "Psychiatrie française, Psychiatrie en France" published by Springer (April 2012).

Mizue Kobayashi

Vice Chairman and Art Director of the social welfare corporation Aiseikai. She organized many exhibitions related to Art Brut. Launched the atelier pangaea in Nakano ward where people with disabilities enjoy creative activities. Curated the exhibition Europe tour "Outsider Art from Japan" and "ART BRUT JAPAN SCHWEIZ"

(on the Japanese side) commemorating 150 years of diplomatic relations between Japan and Switzerland. In 2016, she became a member of Art Brut working group of Tokyo Council for the Arts.

Rii Numata

Specially Appointed Associate Professor at Urban Research Plaza of Osaka City University, Board Member of the Japanese Association for the Study of Musical Improvisation and Music Therapist certified by the Japanese Music Therapy Association.

While organizing musical improvisation workshops for people with intellectual impairment, babies, children and elderly people, she researches on creating music which is beyond technology and values gap. She has been representing the Otoasobi Project since 2005. Authored articles: “Artistic Value and Social Meaning of Music in Community Music Therapy: A Discussion Referring the Discourses on Outsider Art” (Journal of Japanese Music Therapy Association, 10(1), 2010), etc.

Kazuo Ogoura

President of the Nippon Foundation Paralympic Support Center. Graduate of the School of Law, University of Tokyo. Entered the Japanese Foreign Ministry in 1962. Served as Ambassador stationed in Vietnam, South Korea and France, then as Director of the Japan Foundation and later as Secretary General of the Council, Tokyo 2020 Olympic Paralympic Bid Committee.

2018年2月発行

発行者 日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会
〒107-0052 東京都港区赤坂1-3-5 赤坂アビタシオンビル4階
電話：03-5545-5991 Fax：03-5545-5992
URL：http://para.tokyo/

Published in February 2018

Publisher The Nippon Foundation Paralympic Support Center
1-3-5-4F, Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan
Tel: +81-(0)3-5545-5991 Fax: +81-(0)3-5545-5992
URL: http://para.tokyo/english
